

特31
671

許官

瓜生先生編輯

西洋新書

三編
全部

東京
書林

寶集堂發兌

西洋新書三編序

頃者西洋新書三編脫稿屬余敘
 余以謂是書初編二編既已梓
 于茲而其序皆述書之大意略
 余復何謂乎哉既而又覆閱之猶
 有所未足瓜生氏嘗好諧詼
 數本皆適於人情能令讀者或
 憂而取悅或好善而惡惡蓋不

許官

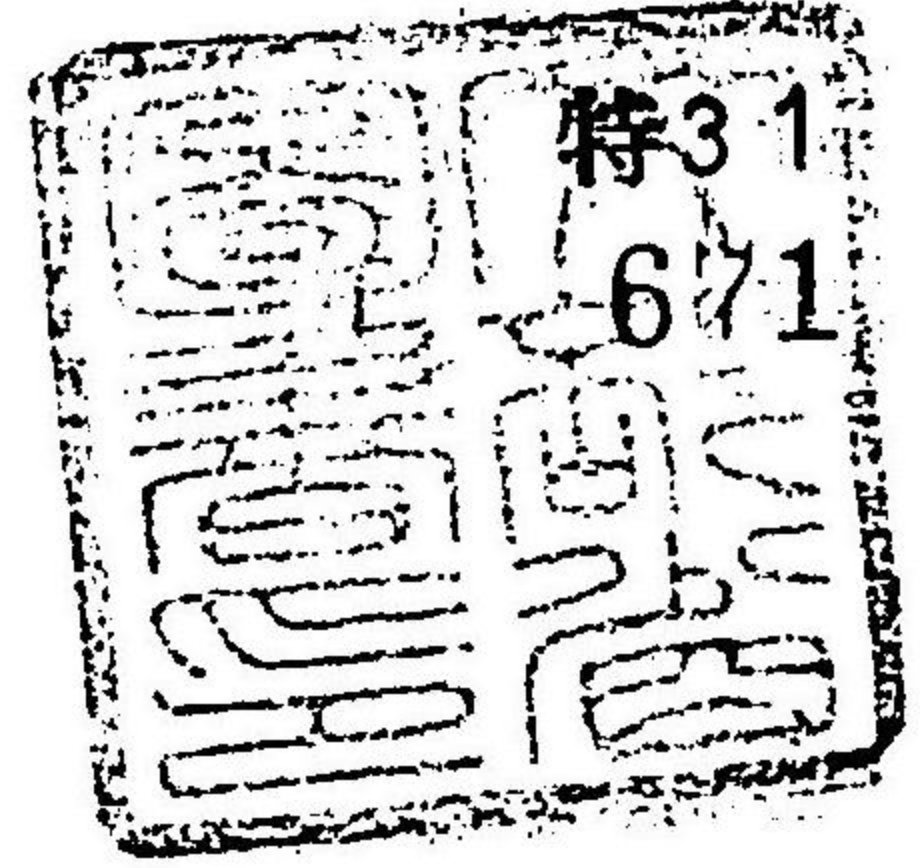
瓜生先生編輯

西洋新書

三編 全部

東京
書林

寶集堂發行



西洋新書三編序

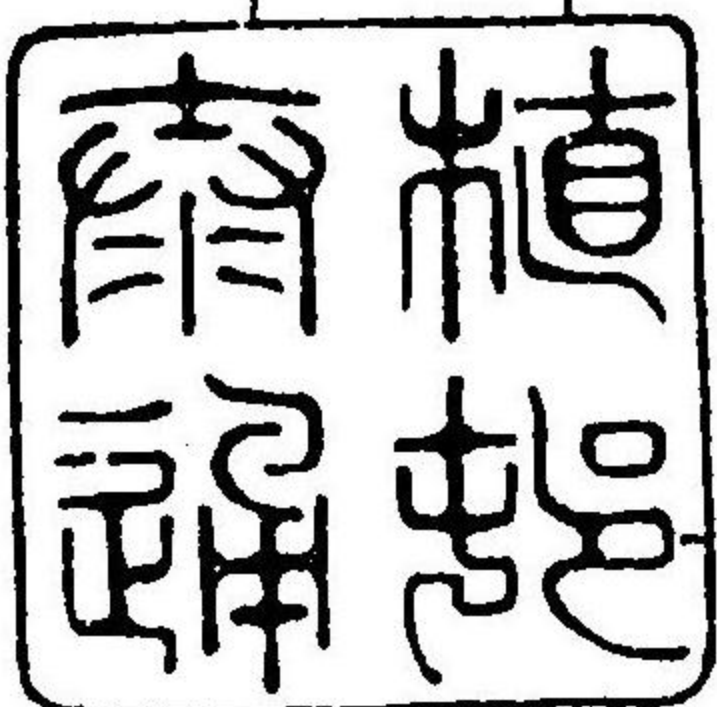
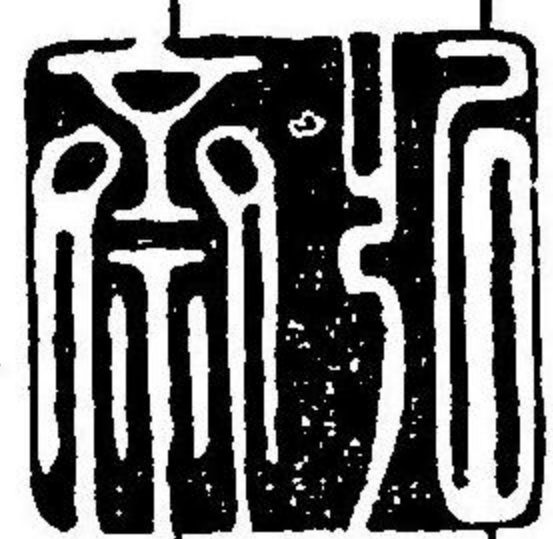
頃者西洋新書三編脫稿屬余敘
 余以謂是書初編二編既已梓公
 干茲所其序皆述書之大意略備
 余復何謂乎哉既而又覆閱之猶
 有所未足瓜生氏嘗好諧詼所著
 數本皆適於人情能令讀者或忘
 憂而取悅或好善而惡惡蓋不可

謂無裨益于世今復更著實際紀
事之書亦使童蒙婦女知海外地
誌歷史之一斑方令文運日進操
觚之士竭盡智力從事編纂者無
慮數十家然文意艱儉俚俗不易
解者儘多以諧詼之文記實用之
事俾齠童兒女如讀坊間小冊子
樂而不倦者獨瓜生氏之著為然

其有裨于世教何如耶余因不辭
而作之序

明治五年壬申仲秋

植紹泰通題并書



上の巻 目録

○ 亞米理加及びの説

○ 閣竜の説

○ 「バルチモール」府の説

○ 「ロング島」合戦

○ 亞米理加勢敗走の説

○ 白原戦争の説

○ 華盛頓氷と渡つて

○ 突連登城と陥る説

○ 「チャドスホルド」戦争

○ 華盛頓府の説

○ 墨是哥「アカボルト」の説

○ 華盛頓「紐約」へ出張

○ 十三日「檄文」廻り説

○ 華盛頓謀計

○ 兵と「紐約」へ引揚る説

○ 華盛頓一計

○ 波林斯城と陥る説

○ 「バングトン」戦争

○ 亞米理加勢敗走の説

○ 「スチルウォーター」戦争

○ 英将「ブルゴマン」降参の説

○ 合衆國旗章の説

○ 約邑戦争英将

○ 閣竜華理斯降参の説

○ 「ブリスレット」華盛頓の賛

下の巻

目録

○ 費勒特費府

○ 市中の雑説

○ 英吉利勢敗走の説

○ 日耳曼邑小史

○ 英亞戦争の説

○ 英亞「モンモルツ」小史戦争の説

○ 英亞和睦

○ 華盛頓大統領とる説

○ 紐約府の説

○ 新文紙の説

○新鑛道の説

○啞院の説

○学校の説

○芝居狂言の説

○合衆國大統領

○歴代畧記

○拔答責亞港の説

○病院の説

○盲院の説

○文庫の説

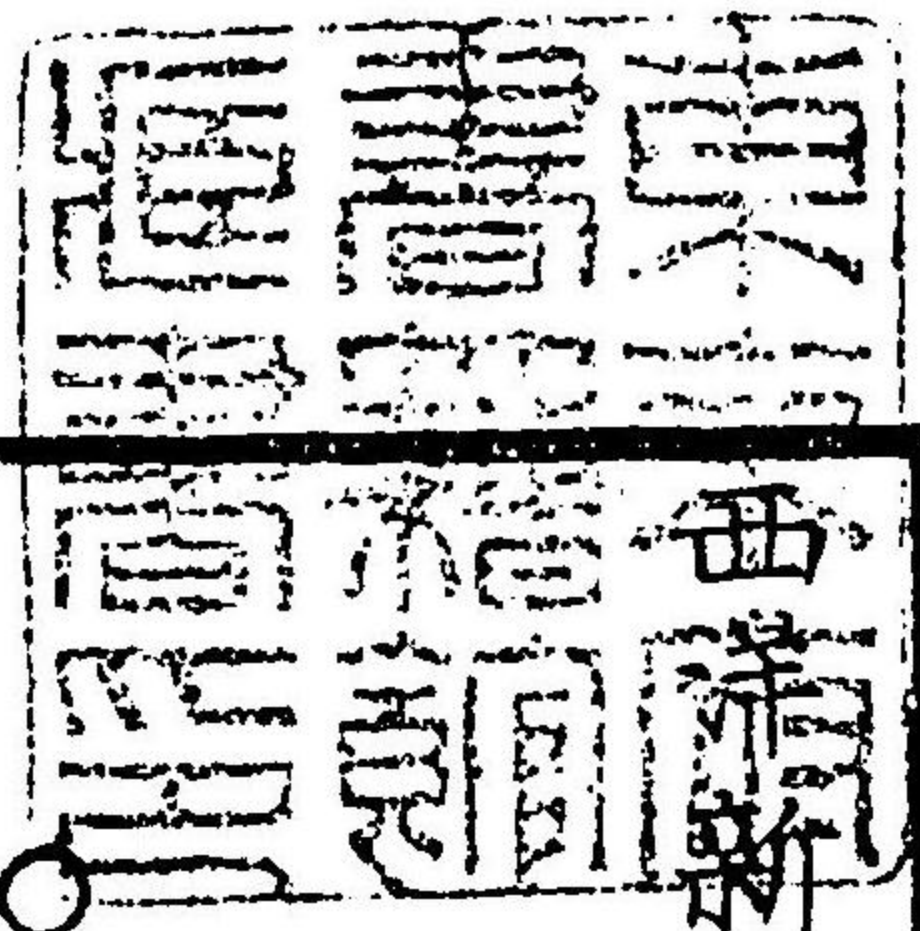
○世界一の大艦の説

○シントウインセン島の説

○「ロウアンダ港」の説

○香港の説

通計 三十五條



西洋新書第三編卷之上

東京

瓜生政和編集

○亞米理加の説 英閣竜のそま

○亞米理加とい西洋語より新しき世界と云ふものあり又一説小

○亞米理加ハ波爾杜瓦爾國王の臣下よりて亞墨利屈氏多者既小

○初編の條下小説なる閣龍が大功と羨と慕ひ閣竜が航海の始

○めより十五年の後彼千五百二年今より三百八十年前亦

○航海して其地の南部の國「テルラビルマ」今の瓦辣那多之地

○小至り其土と開拓めると夥しく大い小地理と究め物産を

尽くしつゝ、あゆりきゆす亞墨利屈氏の名ふなづきて称ありとも
も言へり然れどあゆりきゆす亞墨利屈氏の名を以て國ふ負せんより
へこんがや閣竜の名を國ふ附しこんがや閣竜州と称へて當然のやと
諸書小論せり

「ボガルト氏こんがや閣竜を讚せし一書中、小曰こんがや閣竜、あや亞米理加
州と發見し、蓋世の偉功を著へせしを以て其古々る
熱弩亜の人、是と妬み誹謗する者少をわらず、一時客
来り種々の説話の序、小閣竜と誹りて云ふ、足下が
新規、小國土と見出しつゝ、まご實ふ偶然の僥倖、ふして
深く是と称賛、不足らんやト、こんがや閣龍聞て打點頭、真

不然ありト言て、傍と顧み、あや若くは鶏卵と採出し、客ふ
對ひ、足下試ふは鶏卵と
以て机の上、小卓て見ぬ
客へ頭と打振りて争う、机ふ
鶏卵と立ると得んやト言
ふ時、小閣竜、鶏卵と採りて
尖たる所の先と欠き、平ら
らふりて、机、小卓より客、是を
見て、先と平らうふ、こんがや為さむ
誰ふても、是と卓ざらんや



閣竜云ふ然り唯世の中の夕へ爰ふ心と附べきあり
人け処ふ心と用ひ何事も倣し難き理あるべからず
吾亞米理加州と見出しるも何ぞけ理ふ異あらん
やト云ーとぞ

前編ふ記しる合衆國の首府華盛頓の創建は彼千七
百年今より八十二年をどあの頃ふしては刃英吉利の
所屬と離し不羈獨立の國と成りたるとも未だ總國
の首府と定る所あり因りて政事と出すの府と營むべ
き勝地と擇ふは時一新紐約府ハ人口十三万「波士頓府
ハ人口八万市街相連つて最繁華の互市場あるれども大

政廳と置き若軍旅の大事事件かどある時ハ敵と引請防
禦と堅固ふするの地形ふあらずとて終ふは土と拱新
ふ繩張して土木の役と起しけ府と大いふ造築あり稱し
て華盛頓とり然れども其始め兩三年の間ハ只一ト町
も人家の連続しはるけ処彼處ふ散在して互ひ小用と
便ずるふ不都合ありしが彼千七百二十年今より六十二
年あの頃ふ至りてハ人家一千七百軒人口九千二百餘其
中白哲種五千九百餘人黒種二千三百餘人なり其後
ふ至り「ホトマツク川の岸ふある「カルレストウン府及び其
周辺の大小の村落ふ住する人数と合して二万餘人と

成りしと云るが彼千八百七十二年の今日に至りてはすべ
前編の書記せしが如くあり

同島の内墨是哥國の地へ今より三百二十四五年おふ
伊斯把泥亞國の名譽の猛將コロテスと云る人一軍
と率ひ来り此地を取りしより考て新伊斯把泥
亞の名号あり然れども今共和政事の國と成る
け地ふ三ツの都あり一ふ「墨是哥府」二ふ「キアタルセ
イラ府」三ふ「キアチマラ府」何れも繁昌の市街あり國
中ふ廣大なる銀の鑛山ありて白銀と産するを夥し
きふより富貴の者へ常に乗る處の車の輪と銀を

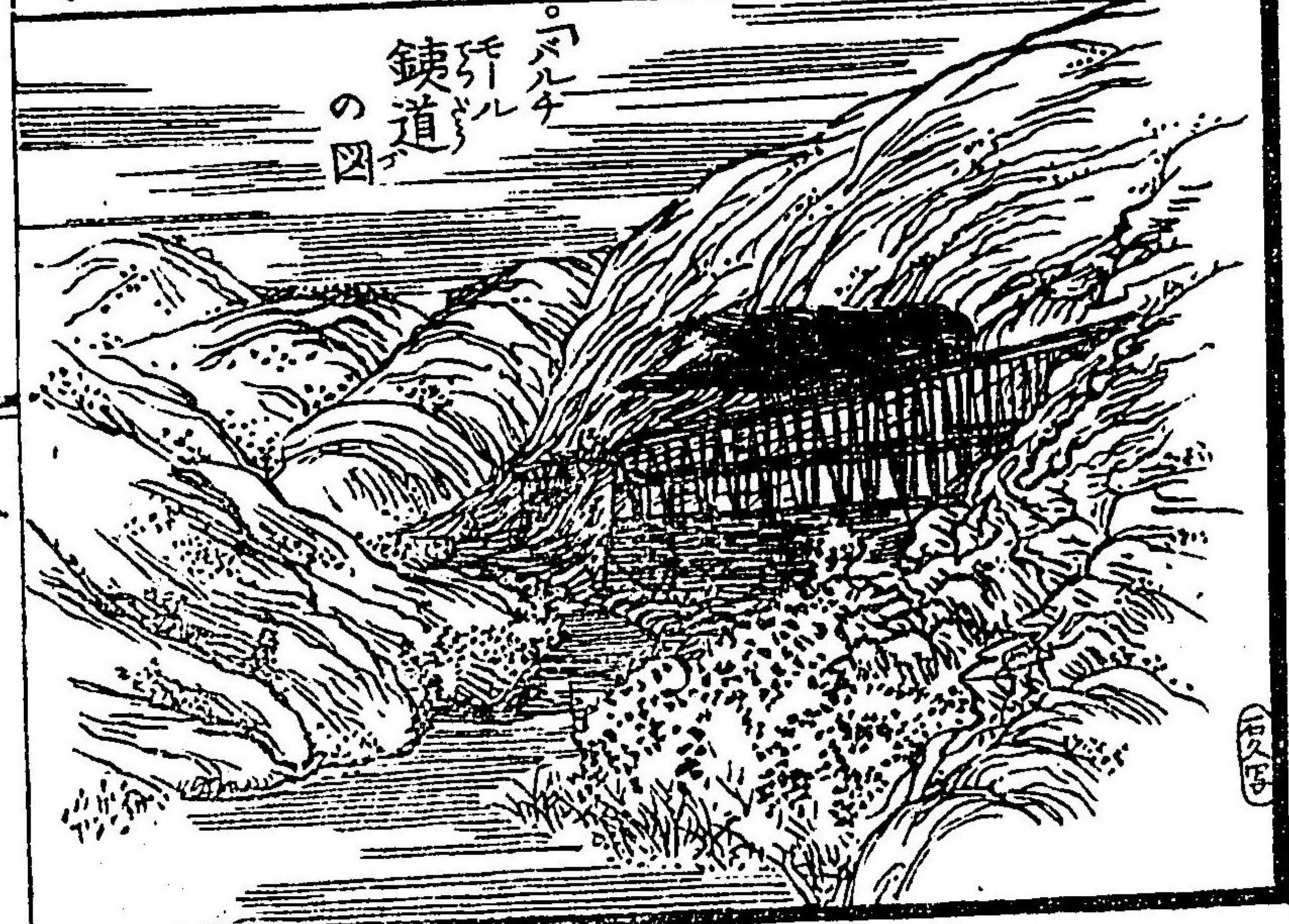
造る程あり今日日本支那ともよく通用めす弗銀の皆
此墨是哥ふて産するものなり再説するの第一の都「キヤ
チマラ」の近き傍りふ「アカボルコ」と云ふ港あり墨是哥
海灣中第一の繁華ふて三都ふも劣らざる所なり
彼千七百九十八年今より七十四年おふ大地震あ
りて港の市街半分の地中ふ落入り残りたる家居
も或いは潰れ或いは焼失し人死するを夥し是ふ因
りて終ふ廢蕪し今ハツの村町と成往たりけ處ハ
「サンフランシスコ」より「巴那麻」の船路ふて墨是哥灣と
往來の船ハ或いは一日或いは半日碇泊するの港なれハ

前小包巴丹船の條下小記すべきと書漏るゝことば
華盛頓府と與廢の差別ある小對して爰お出す

○マレーラントバルチモール府の説

バルチモール府へ季候華盛頓府と整くくして華盛頓府
より北西の方へ離るゝと十七八里の処小在り家数三
万軒餘人口三十万府内市中の往來ハ井字小して東
西へ一里十五六丁南北へ廿七八丁あり當所ハ古くより在る
の市町るれども彼千六百八十年今より百二年おの頃
ハ人家猶千軒ハど成りと云へり府下と流る大河三
筋ありて其一筋ハ市街と貫き通り人の家の軒下迄

船と自在小寄るあり故小諸
品貨物と小船小積て出入
する小便利と極むけ地ハ産
物多くして亜米理加中お出
るもの一ツくして非ずと云と
あり府の入り口小二重作り
の石の大門建く又市中
の中程小横五十間余堅二
丁おのの廣場ありて其中央小
白き石と高く積揚上お白



蠟石を以て刻する立像の人物を居其左右に白き石を以て造りたる大いなる鷲を置たり是は大祖華盛頓英
 國との戦争に勝つるのち當地に造立する物とぞけ市
 街各物の損傷に都て華盛頓府と相似れば爰に贅
 するを劣く

再説華盛頓府と出立する皇國の人々の頻りに蒸気
 車と走りて益四ツ半時をハルチモール府に着し町の
 入り口の石の大門にて蒸気車と下り馬車に乗り
 移る兵卒四百人など小銃と持大砲と引き騎馬の
 者百六十人また音楽を奏するの一隊ありて各三行



市中の水菓子
 の歩の歩

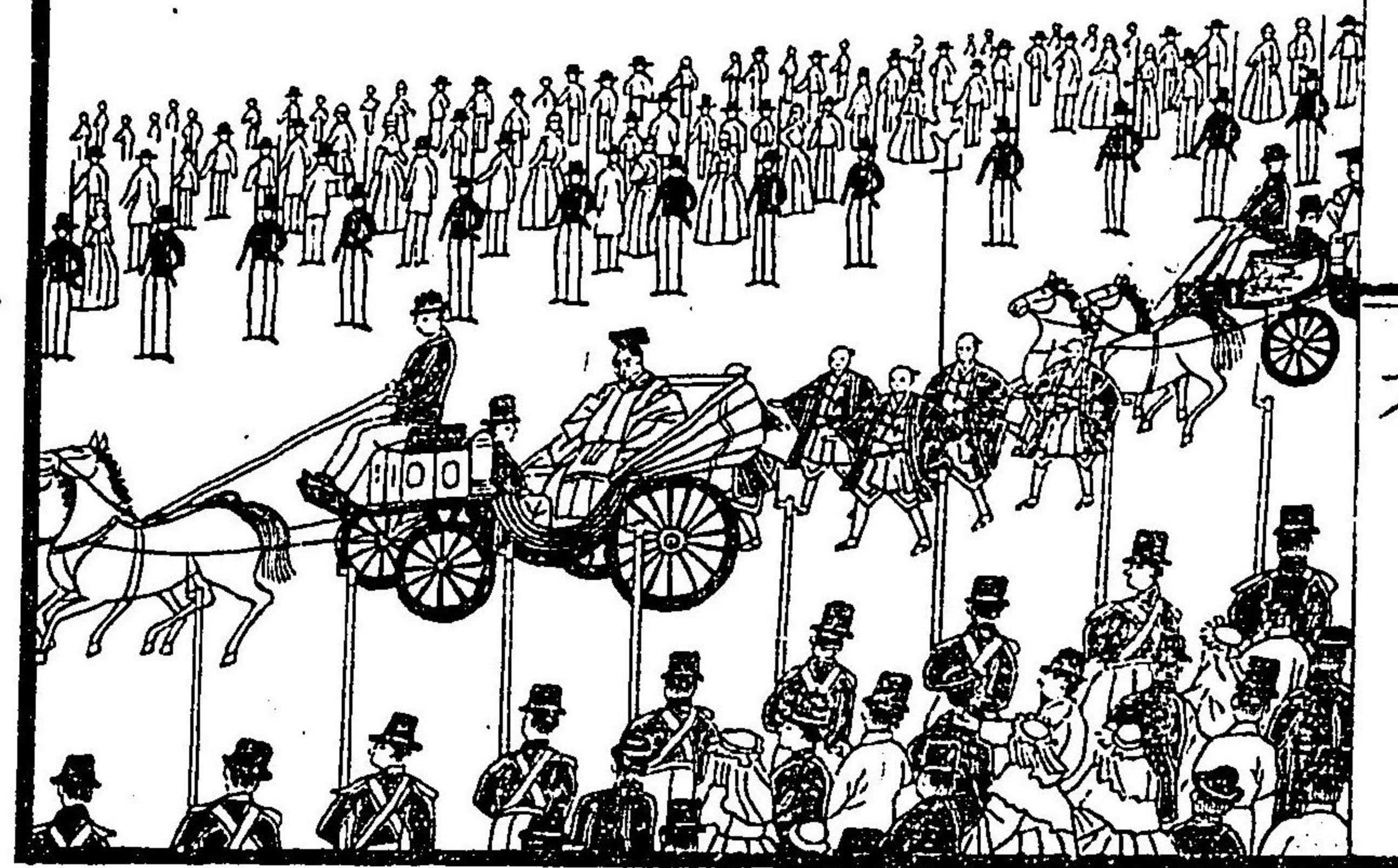
並びに警衛を其外消防の兵卒
 八隊ありて一組ごとく列立
 何れも蒸気を仕掛たる車の
 上へポンプとて水を吸ひ揚る
 器を乗せ引せ階子残
 荷げたるものありや鳥口に似たる
 道具を持し者ありて固り
 最嚴重なり斯て徐々と進
 ん往り市中の左右に三階
 四階より七階八階の高樓魏々

西洋新書

六

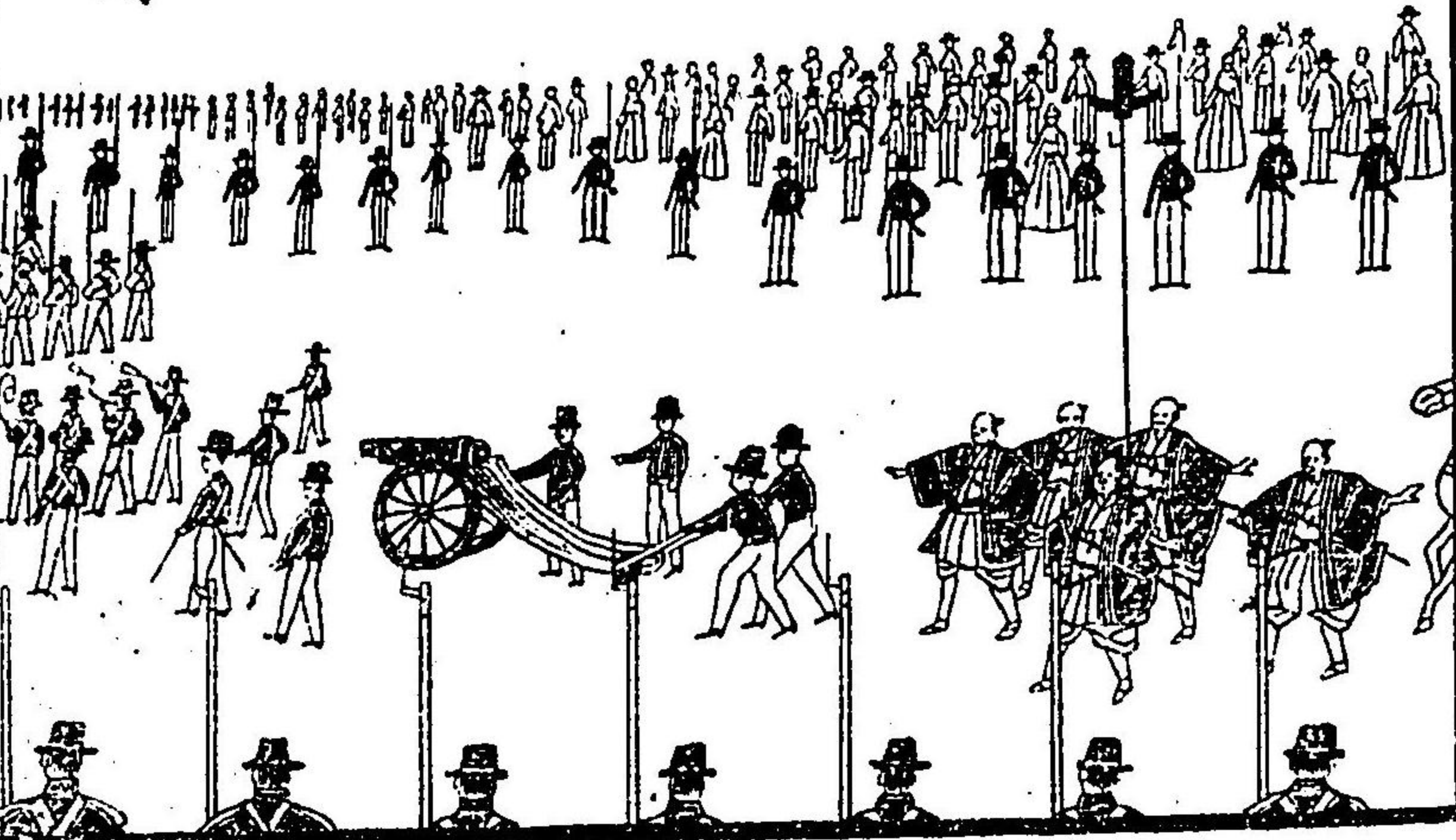
とく山やまの如ごとく小建こたて並ならび見み物もの人ひとの家いえ々々の窓まど乃な中なか往ゆ来らの
 両側りょうがわ小群こぐん並ならび居ゐて男おとこの冠かんむりを
 脱ぬぎ女むすめのて手拭てぬぐいを振ふり或あるひる
 日ひの丸まるの旗はた或あるひ大日本おほにっぽんと書か
 る旗はたもど打うち振ふりて祝賀あはれがた者もの
 雲霞うんせの如ごとく一ひと往ゆくと二十七にじゅうしち八はち丁ちやう
 武器ぶきを製造せいぞう者ものの館くわん小至せうしと
 門前かどまへにて車くるまより下くだりおの館くわんの
 二階ふたかいへ登のぼりえる小室こむろ内うちいと

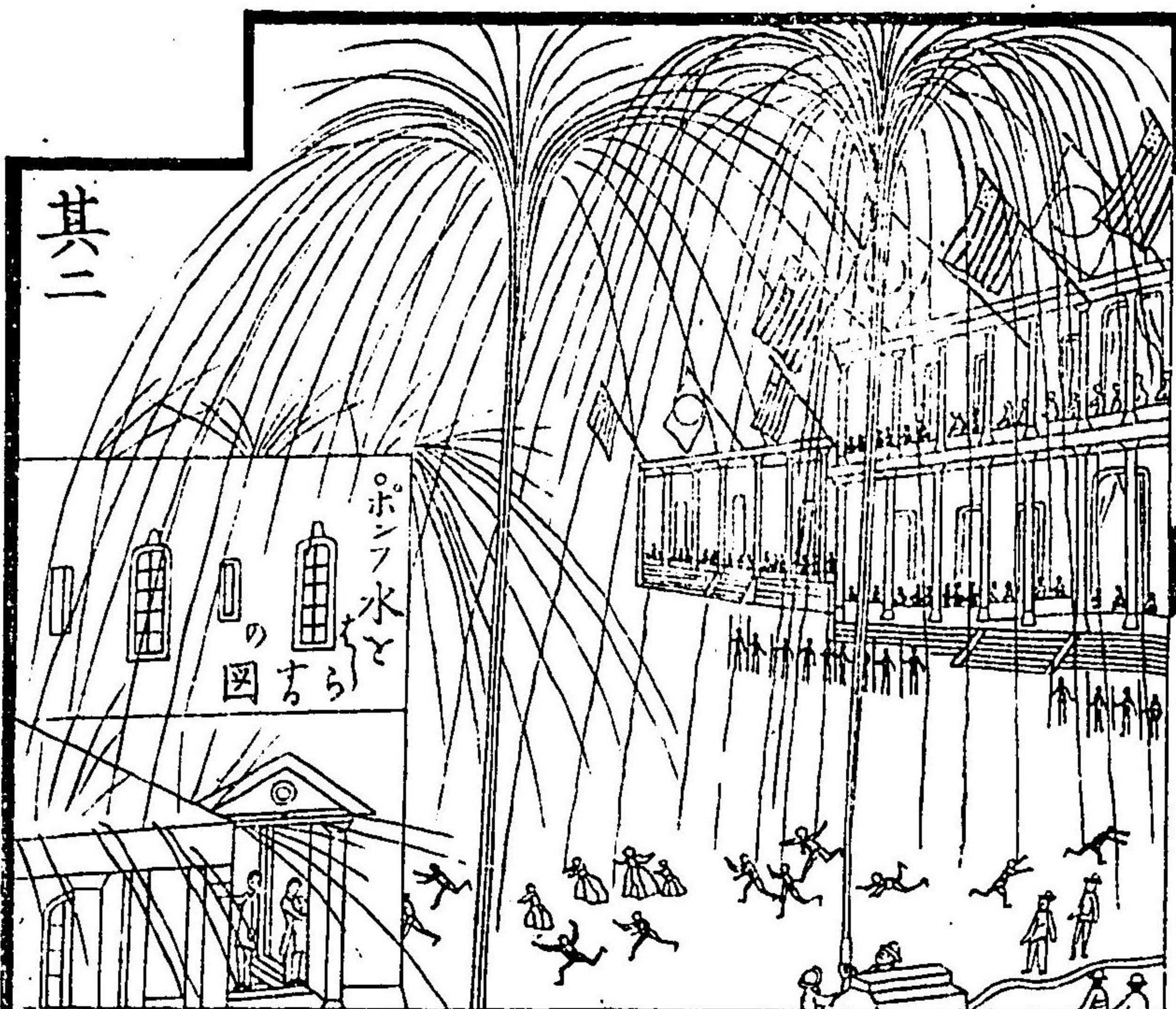
一其



廣ひろく横よこ二十間にじゅうかん堅かた三十間さんじゅうかん余よ小こ
 前まへ後ご左ひだり右みぎとも小棧せうせき敷しきと構かま
 え紅こう白はく黄わう紫しを雜まじへたる種たぐひ々
 の草花くさなを彼方かのへ此方このへに飾かざり中ちゆう
 央ちゆうのた高たか臺たいありて我朝わがあした人ひと此
 處こゝ小休せうきゆう息やすみする小四方せうしやうの棧敷せきしき
 小見物せうけんぶつの婦女にょにう童蒙どうもう花毛はなけ
 繩なはのうち小充満せうちゆうまん一いつ廣場ひろばの
 兵卒へいそ二百人にひゃくにん餘隊よらいを組列くみりゆう隊
 分ぶんち小銃せうじゆうを携たづなえて調練てうれんは

亞國 日本 請待 圖



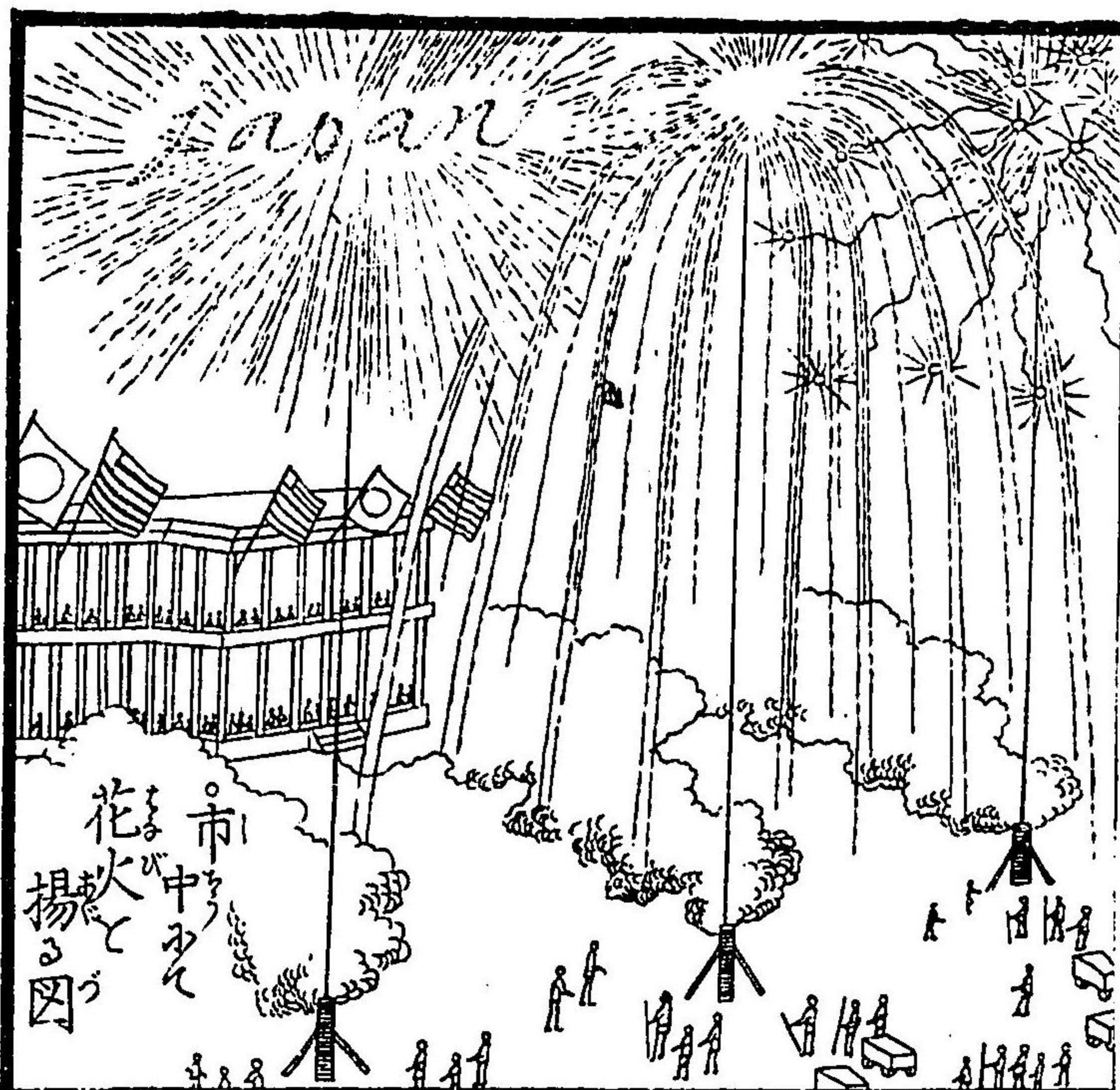


其二

我朝人小見せしむ斯く後
 まゝ二階を下り再度馬車小
 引き去り以て未中刻より旅
 館小着せ家作の模様ハ
 華盛頓府の造りと同しく
 去る屋根の上小日の丸の大
 旗を建より夕暮に至り旅館
 の高樓下小於る彼の八隊の
 消防の兵卒我朝人へ馳走と
 しく出火を防ぐの運動を為て

見せしむ其松ハ一組合ふツツ蒸気の仕掛あり車と引來り
 所々の水道の井の中より「ポンプ」と以て水と揚る小高さ二十
 間余小及べば水ハ四方へ散乱し群集あり見る見物人の
 天窓の上より落り蛇然龍の如くあり人々是れ周章狼
 狽四方へ快乎逃走る騒動涌が如くあり階子ハ長さ小至
 りてハ十三三間のものみれども取扱ハ実小も軽し
 階子「ポンプ」の多ハ小記しる條と見合し知るべし
 「ポンプ」ハ揚る水夥しけむハ往來眼亦行潦とあり連漪立と
 り暫時小く火の鎮まりし松と示し元の如く小列と組
 備と立て引退けは是れ代りて押出に來る兵卒凡五百餘

其三



其人各隊列を別ちて以て早打の調練を為す小兵卒が小銃の扱ひ実ふ自在を盡しけり
 斯てまゝ夜小入るば花火を揚て是と見せりむ仕掛のユモ甚ど面白く打揚り煙りの中
 小横文字と以て日本人の着と賀するまゝの多と現をす
 花火の摸模ハ華盛頓府の記一とらとて知るべし
 以所一宿小く廿日朝四ツ時

旅館を立出で直ふ火輪車に乗りてブルチモール府を辞り去り「ヒラテルヒヤ府とて進こける

「ヒラデルヒヤ府より」新約紐府の條下小至りける記す
 べきと沢あるが暫時爰小筆と止め前小半途小く打捨置る英亜兩國の軍事と再度携出してその残ると補ひ塞ぐあるん

再説彼千七百七十六年三月十七日小英吉利の大將「ゼ子ラル、ホウの亜軍の総督華盛頓が奇計小陥り既小波士頓府と戻き去りけり」と雖も前小新約紐府と攻取んとて波士頓府と出帆ある英吉利の総督列

一ジハ斯アの多クの知らざらば猶モ数艘ノの軍艦ヲと次ヲと
 押進メ既ニ新約紐府ノの港内ニ近クハ切迫シ府内ノの容
 子ヲと窺ヒひけとバ華盛頓ノ豫テ大將トレイトとコソ子チコ
 ツトの兵ヲと募リ「新約紐府ヲと守ラせ置キとバレイガ方
 より英軍ノ数艘ヲと港内ニ乗リ込ムとさるは注進シ
 頻リありけれバ片時モ捨置キ難シとバ華盛頓ノ同年
 五月十五日総軍ハ八千ト引具シ「波士頓府ヲと出陣シ紐
 約ニぞ進ム奈リ抑シ「紐約府ハ合衆國ノ最大ノの繁華
 の土地也華盛頓ノ入府シて嚴シ備ヘと立テんとめらば
 未熟ノ新兵ノとあらば器械ハ不足シとバ配リ更ニ

自由ト得ズ困苦ヲ思量シと費ス折ラら「加拿陀ノ合
 戦味方ヲ敗走シるや注進アリ頻リハ援兵ヲ乞ヒ来リ
 是レもまレ已マと得ズ然ラぬと不足ノ味方ノ中ヨリ
 十隊ノ兵ヲと携リ「加拿陀ニ應援シて差ツハリと愛シ
 「トリオントり者ヲ竊シ英吉利ガ降参シ同志ノ「トリ
 イノと談合シ華盛頓ト俘虜ト英ノ軍門ニ引
 渡シんと企テるが隠謀忽地露頭シて彼ノ賊徒ラと
 英軍ハ逃込ンとバ人心ニ是ヨリ疑惑ト生ジ互ニ心
 と置合ヒて何トも平穩ナらぬハ華盛頓是と見て大
 敵トと小請キ斯ノ如クも速ニ勝利ヲ得ル早く

國人の心と固むる如くと思惟し「費治彌亞」の會同館において衆議と遂させ白羊の皮を措書と以て同盟の十三勅の断然英國政府の管轄を廢し自今弥獨立不羈の國とす又國名と亞米理加十三合衆國と唱ふる由と書記し各勅を布告せしむるに府々村々おて鐘と撞炮を放ち人々祝賀し喜ぶと大方あらざる是がわが軍兵の心と擡動し十倍の勇氣と添しりり案下再説英吉利の大將「ゲージ」の「紐約」と責とらんと陸地の模様を窺ふ時「波士頓」府の大將「ホウ」の「波士頓」より総軍を引揚来り「ゲージ」と一にお成りしり「折」し「ゲージ」の本國英吉利

へ呼戻さし「ホウ」を以て「ゲージ」に代り大総督とありけり「ホウ」の早く「波士頓」府と追拂りしところ耻辱と雪ぎ清めんと種々小軍慮と続らして其容意とぞありしりる爰に「亞軍」の大將「ゼラアル」官の「グレン」及び「ニルリ」官の「ロユウ」ナム其將帥に代りしり時八月廿七日英の軍勢三万余人数艘の軍艦と漕よせ来り「コング」島の三方より押上り「亞軍」の大將「ロユウ」ナム「ロユウ」ナムも兵と率いて討て出たり英軍の兵数の大砲と真先

不連ね小銃の巢口と一列不揃え同発連発隙間もをく
 打掛く来るの及輪々たる丸の音響の碇打浪と声と
 合して夥る勃々たる煙の色ふの天空の日も光りと失ふ
 をく不如何ある悪鬼羅刹の隊も以猛烈不出逢
 ての微莖不成るべく見えたりけれども亞軍の大將トエ
 トナムの大膽不敵の剛勇あるは且て是らと物ともせず
 前路より攻来る英吉利勢と二歩三歩或ひは五間十間
 づ追捲り討退ぞけ勢ひ盛大ありたりども大將クレン
 病病不代り今参りのトナムあるは土地不案内
 不て防禦の配り薄うりけりとも英軍早く同道より進

トナムが勢とトエリワング勢の後背へ出亜軍と狭んで討
 立けまば両將の後敵と請兵卒是は狼狽して隊列忽
 地紛乱ありけり時元帥華盛頓へ「紐約府不在りて
 敵船の横根を窺ふ折々風俄に吹起り草木海上へ靡さ
 けまば當府へ敵の寄せぬと知りロング島の合戦心元あり
 直ち一駿馬を跨り飛が如く不走りてロング島の戦城
 近きに至り小山へ走せ登り遠望鏡を以て望みん味方
 既不敵軍の爲不狭し圍を討あり逃るあり俘囚とある
 あり降参するあり斯る中不猛威と落さず必死と攻撃す
 るもあり大難苦戦の体困迫極りて見えまば華盛頓の

「嗚呼とぞり、霎時忙然、りりるが、稍ありて、大息つき可
 惜、武勇の兵卒と爰、空しく失ふとよ、ト、衝立らるる、怒
 然、り時、日色西山、不没、一晩、向とぬる、お至り、英軍兵
 卒と纏るの、摸拵あると、見て、少しく胸と安ん、ト、追々、紐
 約より、走付来る、軍勢と早く、諸方へ、分配、逃散り
 たり、一、ロング島の、敗兵と、尋ね、求め、け、地へ、こそ、へ、集め、り
 け、今日、の、合戦、大將、一、グレン、が、病氣、と、一、ロ、ト、ナム、が、地理
 不案内、より、一、斯る、敗軍、と、引出、一、シ、ユ、リ、ワ、ン、と、始め、一
 千餘人の、兵士、英國の、手、不、陥、り、り、然、と、バ、華、盛、頓、へ、敗
 軍の、兵と、挫、恤、休、せ、自ら、陳、中、陣、外、と、夜、廻、り、て、用心、いと

嚴重あり、斯て、翌日、お至り、一、マン、ハ、ツ、タン、島、より、新、手、の、一、軍、應
 援、と、て、来、り、け、と、一、総、勢、少、く、色、と、得、ふ、り、華、盛、頓、へ、今
 新、手、の、加、り、り、上、の、少、く、も、宥、豫、す、べ、く、今、宵、敵、軍、へ
 夜、討、と、仕、掛、け、一、ロ、ン、グ、島、の、訖、と、報、え、と、諸、軍、勢、お、令、と、下、
 容、意、と、急、速、と、は、是、什、麼、り、お、斯、る、疲、勞、の、兵、と、く、勝
 誇、つ、ら、英、軍、お、蒐、向、り、と、計、校、薪、と、抱、いて、火、お、入、る、の
 と、之、お、非、ず、や、と、兵、卒、ら、皆、私、語、誹、と、ど、華、盛、頓、耳、へ、も、入、れ
 ず、日、色、閑、ある、と、待、進、軍、の、時、来、り、と、忍、び、く、お、整、列、を
 一、総、軍、支、度、出、来、る、や、否、や、疾、入、る、肩、と、車、お、乗、せ、拙、重
 と、荷、ひ、負、へ、せ、て、敵、軍、の、方、と、後、方、お、り、一、紐、約、と、く、総、軍

と引揚るゝ迅速あり是華盛頓が一策ふて華盛頓ハ英軍の
 寄せ来らん」と恐と「紐約へ引揚んとす」とも総軍九
 千ふあまり其中小手負病人多く器械彈藥糧重も少
 むらねば敵不知らきて追討さると必定期あり然りして
 困兵ふて英軍と迎へ戦んと成難けと諸將のさふり
 含め斯ハ計らふものありとぞ儲こそ英吉利の陳営ハ
 者忽地走せ来り今宵亞米理加勢討入り来るとの注進
 其大膽と呆と果去来と狂気武者と取控んと
 配り嚴重やと待々ことと夜明成りても攻寄せざれば
 竊小亞軍の陣営と窺ハすふ空々たる廣原とあり更ふ

人の敵も有らぬ初めて「新紐約へ引退せよ」と知り大將
 「ホウと始め諸勢一同足摺とわい悔ふなり華盛頓ハ「紐
 約へ引揚るまご三日三夜の間多し馬上小跨り居て一睡も
 ろさかりなれば流石小身心疲とすも猶諸勢と励
 英軍と「紐約府へ引上げ一戦と遂ぐ思ひつゝ然る
 さい勝敗小係らず府中の市街と荒し諸人小難を掛か
 ん如ずけ地と英軍小渡し昔時他所へ避んふへと衆議一決
 ありけむ急ぎ諸軍勢と纏め「紐約より北へ十三四里離れ
 「白原とよ地まご引揚る英軍の總督「ホウハ是と聞
 直ち小「紐約府へ押上り続ると「白原へ追慕ふ華盛頓ハ早く要所



華盛頓
一掃戰場

と占り畑中へ刈り唐黍の売と
根をきりて其根を積あげ一帯
の玉除土を築立り華盛
頓の戦ふ毎に必ず胸壁を築
くと常とるに兵卒もいっ
う術不熟て斯速くはみ成り
たり斯在り処へ英吉利勢は早
追ひ迫り勝誇りたる癖あり
我劣らんと競ひ掛れど聖米理
加が彼の胸壁の蔭より出

没自在に働きて元帥の指揮するに
の妙あり英軍頗る練磨るも更
ならず華盛頓も我が兵士のま
小軍を進めず只味方の人数と
劇戦数刻不及たりとも更不
一ホウハ一ト採不打推うんと思
破り難きと知り其日へ軽く兵
華盛頓の英吉利方の援兵次第
の戦争と遂る時節不非ずと亦
陣営と移りて北加斯徳の地不

ル官の大將「レイ」ハ七千五百の兵と授け、
 らしめ其身の「紐折爾西」陣と移し「弗的理」の地と
 相互ひ小應援あると構へり英軍ハ華盛頓ガ本營と破
 らんとるを討死多負多きこのて勝利するて更ハ
 先その技業と拂ひ除き然し幹と倒す不如すと華盛頓
 ガ營へ向はず「弗的」ワシントンの地へ兵と向り元帥華盛頓
 けよと聞「弗的」華盛頓の守將「グレン」の許へ使ひて走せて
 英軍の威勢猛り當り難けとバ急ぎ城と宍き當所へ
 来らまると言送りけとも「弗的」ワシントンの大將「グレン」
 ハ嘲り笑ひ敢て是と聞入れず謾りハ英軍と引りけ

一大戦小及び英軍一千餘人と討取りとも衆寡敵
 難く終小落城小及びり爰於て「弗的理」の地の大將
 英軍の来らぬ先小と急小柵と宍きけとも兩城忽地敵
 軍の手小陥りり元帥華盛頓是と聞き「弗的」ワシント
 ンの守將「レイ」我が指揮と用ひず強て英軍と戦争小
 及び味方の大利と失ひ兵士の勇氣と挫きりり「弗的
 理」の地も続いて斯ハ成往りり数回歎息あるも更
 小其詮あらざりり元帥華盛頓も今ハけ処小止まり難
 一と直小「紐折爾西」の地と引あげ「費勒特費府」の方
 へ退ぞきりり小英軍早く是と聞つけけ圖と扱さず撃

取と追迫して至急めて首尾眸中不接これハ亜軍
 の従兵大り不憶一皆ぬけくお落うせて一特拉華川と渡
 るころハ総軍勢三千不過ず夫すら衣食不缺一今
 嚴冬の氷まる道不多くハ沓を素跣由急足破れて血土不
 印一凛烈なる朔風不弊衣の肌を裂くと夫のこあらず兵糧
 乏しく口不飽て能わぬ武き心も次第不芳と日々夜々不離
 散して出づ將帥兵士さく面上不憂鬱と含まざるハ多々不
 英傑の心魂も碎裂すべき期あるとも一人ハ華盛頓ハ從容
 とて屈思る諸勢の忠義と揚賛一病痾のりのと向ひ
 るごとく後來必らずるとるべきの目的あるとて以て人



の心魂と揺動せしめ斯る大難
 困苦の内不在りて憂慮の色
 と顯りざるハ量の大志と
 べきあり斯て一賓刃切の地不
 りハハ勇野々より集りて
 二千餘りの援兵を得ふれば
 又分離せし兵卒も追々不纏り
 来りて総勢再び七千餘人と
 成りたりり爰不於て華盛
 頓ハ早く一軍して花々一

勝と得ざるは味方の志氣を引くと難しと思惟し僥倖
 英の軍卒程進き「突連登城」小跋扈し居るは先け処と攻取
 んと十二月廿五日の夜半小朔風凜々烈寒手足の龜むと
 覚えざるも勉めて総軍勢と操出し「三手」分け「特拉
 華河」と三所より押渡り「突連登城」及び百隣克敦城
 と襲ひ攻んと進發せし河水氷封て渡頭三ヶ所とも船
 出難し然れども元帥華盛頓の一隊の固苦と顧みず種々小
 船強して遂に對岸に押上り夫より兵と二手に分け竊々小
 進んで「突連登」の大子欄より攻めつけ英軍の不意を
 打とふ配りぬる間もあつらざるごとし流石練磨の兵卒あれば

至急の間小隊をり其処彼処より発炮せしむと華盛頓は
 今日爰ふて十分ある勝利を得ざるは味方の勇気と引立
 難しと思ひ一人り著勢に先達て英軍と攻むるは破竹の
 勢ひと振ひけしむ唯々狼狽周章る城兵何れ敵すべ
 き一ト支えふして皆逃失せ「突連登城」暫時小落陥り俘
 囚一千餘人分捕も若干あり然れども別のニタて「特
 拉華河」の氷に支えらるる空しく後へ引返して「百隣克敦」の城と
 攻ざりければ元帥華盛頓も残り惜くぞ思ひしる英軍の総
 督「コロンボウリス」が「紐約」西に在りて敗軍と聞き大に驚
 き「コロンボウリス」が「紐約」ありて本国英吉利へ歸らんと

すと呼戻し「突連登」を取り戻させんと直ちふ是ふ向ひ
 ちめり然し「閣倫華理斯」の急ぎ「波林斯」敦城ま
 ぐ馳付来りけしとらふ一軍の兵と止め総軍勢をりん
 卒して「突連登」を奔向あり元帥華盛頓は是を夢き
 総軍と引て出で迎へ二條の小川と前ふ當て陣と占てぞ
 待けり英の大將「閣倫華理斯」の兵と頻り押進め亞米利
 加勢と間ひ近き彼方の丘ふ營と構え相對しく白眼あひ一兩
 日と経ふるうち次第ふ味方加るも多明るば弥亞軍とせめ
 ろち雌雄と一時ふ決せん其備とぞ做しつらり然し
 亞軍ふも油断るく兩陣ふ焚燎火へ川ふ漆山ふ倚り數里

の間ふ連りて炎気の天と焦す々と夥後こそ見えつらり
 華盛頓の今我が小勢と以て英の大軍と戦ふ十ふ一ツ
 勝つとも味方と多く損ずべし況んや敗軍ふ及ぶ於て
 おや人氣衰へ再度兵威立ざるべし然りとしてけ終引退り
 ぞうへ組折爾西弱へ全く敵の手ふ落陥り新兵と募
 るの道爰ふ絶せん如何做して宜しと軍慮ふ黙然
 たりるが既ふして一計と案り出陣營ふ僅くの番兵
 と止めて燎火と盛んふ焚揚させ自ら総軍と率ひ閑道
 と押廻り英吉利勢の後方へ出で「波林斯」頓へ攻め
 英の大將「閣倫華理斯」の椅子ふめりて終夜眠らす亞

軍の方と打詠め居たり一昨夜半小至り燎火の光り倍盛ん小昇ると見て新子の兵や加り成んう然とも夜明あべ下當あて微莖小成んと勢ひ込んで俟うけたり時華盛頓頻り小兵と急ぐ敵柵近くぞ成りけり又一波林斯敦ふ今日いり大將閣倫華理斯が亞軍と討の布告あは是が應援と為んとて二大隊の兵操り出り来り夜將小明んと為り一條道の曲り角小て華盛頓が先手の勢と思はず礮と往あひ兩軍鼻と突合すとば奔炮するの暇あく双方とも鋏炮の莖尾極んで振りふり叩き合とぞ成り然とも亞軍の筒ハ

取集めりの小く劍の付りいり英軍の筒ハ皆尽く劍付をとべば劍先小突立られ加之不意と討んとて不意と討れらる小似とば亞軍の先鋒忽地破らと二陣と差しを頼れかる華盛頓は是と聞き暮直小走り来り自ら陣頭小進んでを二三小押かり勝誇りたる英軍と五歩六歩追ひ戻すは勢ひ小引立らと大將討す返せ戻せと今もを逃る兵卒の身と捨りて返り激浪の如く押菟元より不意と討とる英吉利勢の多めは最初の勢ひ漸く挫け次身小踵と廻らせが果に逸足出り右往左往小敗走す華盛頓ハ閣倫華理斯が小軍と近き後方小扣

えとどいへ是と追ふ多疾風の如く
 直ち小波林斯敦城を附入れ
 城兵是と防かん厳密を砲す
 といども華盛頓の物とも思はず
 乘来る玉と風も散る木の葉の如
 く煙氣を侵入して進撃すとい
 諸軍是ふ勵まき我劣らぐと
 競ひあつたけ猛勢のりて敵せん
 英軍漸々逃失く波林斯敦の
 一城須臾小華盛頓の手へ落階り



プリン
 スト
 城
 の
 跡
 の
 跡

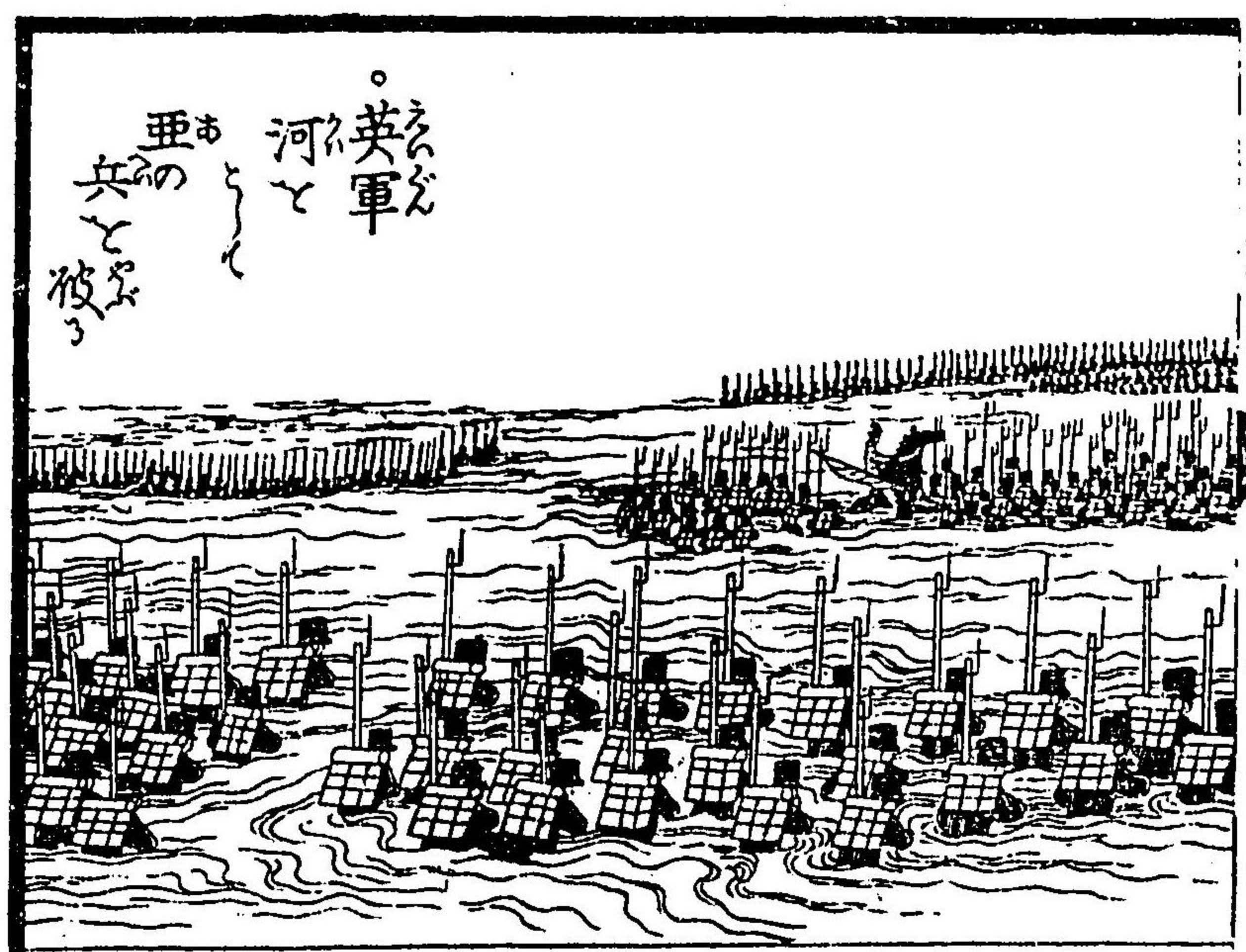
三百人ぞ得囚しる爰ふ又英軍の大將「閣倫華理斯」其夜
 將不明んとする時早総軍と操出さんと整列と組折ら「波林
 斯敦」の方ふ當りて砲撃の音き夥多發りけど急ぎ弁候
 の兵と出さる密小川と渡りて華盛頓が陣營と窺へる
 小焚残る燧火のふす煙まるといふて敵兵一人も見え
 ざる由あると「閣倫華理斯」初めて亞軍ふ欺れらると知り
 替時景を居る「プリンスウイキー」の地ふ多く兵糧と込め
 かきと逃げけ処と探らるといへ一大夕と自ら諸勢ふ先達て援軍
 りさんと走らり華盛頓もま「プリンスウイキー」の城と乗り取
 るとわらるといふと「突連登」の英軍探て返り援ひ来ると知れば残り

惜くも攻めりて斯く波林斯敦城の大将曰エトナム一隊の兵と
 授け守らせむ元帥華盛頓の総軍と引卒して「モルリス
 トンの地」に退き暖和の時節の至ると後ち成る軍と避んと
 するに必竟衣食彈藥の乏き故とぞ聞えり爰も「波林
 斯敦」に止りたる大将曰エトナムの僅の小勢と引具くと箴城と
 ぬくこととて撤し臨に寔に應り討て出で全勇各所の英吉利勢
 と追をらひ切從之俘囚とするもの一千餘人及びびるに比類
 稀ある働きふぞ有るに度々の戦争実ハ華盛頓が深慮ハ
 ならず兩度の勝利ふけ日頃沈み果る亞人等が心の愁憂と
 恢復もとむ輻の射の雨と得てよと大江と凌ぐとするの勢

有るが如し然とて英國との戦争及ぶると思ひ既ハ降参の
 心組ある國々も又漸く色と直し合戦ぬんと思ひとぞ前ハ
 突連登城ハ勝利と得るとき國人ハ喜びハ堪えず其根元ハ
 能ハ得知らず唯「紐折爾西」のの大新文とて市街の中を狂
 ひ走り或ハ互ハ往通ひて其噂の云々なり元帥華盛
 頓ハ「モルリス」の陣ハ在り英將「閣倫華理斯」ハ「ブリュン
 スウ井ツキ」ハ在陣ハ互ハ兵と出すとあり白眼あひてぞ
 居りけり一日「閣倫華理斯」より「華盛頓」の許へ使者と
 以て傷人病人へ与ふる飲食の料且ハ手當の蒸品と抹寄
 せとせハ陣營の前へ通しぬるべし餘々を風情

おて云ひ越一けとバ「華盛頓の速く小請諾しく陣所しく一觸
 渡一更お妨げと為さるり其大量寛お過るが如く成れど
 もけ頃兩度の戦場おて軍功ありける華盛頓が旗本の兵
 士の話一お我大元帥ハ智仁勇備りて指すところをき大
 將あるとも疵とあるもの一あり其故ハ戦場お臨む毎お
 如何多る危おき場所おても真先お進み自身の死するど
 更お構はず是ハ味方として勸さんとの夕あるんが夫おハ一同
 當惑せり然とど天の擁護おやあるらん今日までハ安全
 あり以後も猶神の助けと願ふのこと云りて多へ厳ある
 時おハ嚴あるとハ一事おて知るべきあり斯て春も過ぎ復も

立木の葉色つ秋も又九月始めお成けとバ英軍の大総督「ホ
 うの諸軍勢と引卒し」費勒特費府と攻取んと「紐約の
 本營と進卒為す」と聞えけとバ華盛頓ハ急ぎ一軍を引
 「モルリストーンと出立」フランシ川の傍らある「チャドスホルド
 と云ふ地まで出張為」け処お陣と敷費勒特費の路を断
 切り英軍今やと待かけり時お九月の中旬お至り果し
 英軍雲霞の如くフランシ川の彼方お現え先鋒既お我
 陣へ押かり来りて只一戦おし追戻し一息休んとす
 折ら後陣の敵軍らりりお河と渡り横合り討て蒐
 とい前軍もまて一整お取返し大浪の如く押し来と



亞軍も奮激突戦して追つ返
 して打合ふ弾丸更ふ勝負は
 付ざりりりり時間道とまら
 りて英軍の分隊既ふ十七里
 ほど費勒特費の方へ打入
 りて府中甚だ危あゝるど
 うと言と多々紛々々々兵士
 の心不疑惑と生下戦い少く
 携うる亞軍終ふ利と失ふ
 費勒特費も引揚ぐ

然とどけ度の敗軍ハ討死も負少き故う味方の勇気
 猶屈せず揚々とくええけと元帥華盛頓ハ再度兵と
 出英軍へ逆寄しく猶も雌雄と決せんと既全軍とも配
 敵營と差押進めたる折悪しく強雨降り注ぎ兵卒
 火薬と湿らせと止り得ず半途より府内と弁り引
 戻しぬけ処において華盛頓も時の至らざるに歎息し諸將
 と相議りて「紐約府の例お倣ひけ処おて戦争せんよりハ
 如ず一費勒特費府と英軍のち不渡り市衢の家居不害
 をらちめんおとして俄ハ「デラワレ川の傍りお究竟の要地と
 撰こ二ヶ所の堡城と構えて以て総軍と早くけ処へ引揚

敵「費勒特費」へ押入らば「嚴」く四方の通路を断切り他の
 英吉利方として應援さすと云ふと「英」と計較さる英
 吉利の大將「ホウ」の軍勢府内と落亡しつゝと聞き
 直ち不「費勒特費」兵と操り入ると今の「華盛頓」も恐
 らず不「足らず」と猛威を振ひて「英」も「英吉
 利」の北部の大將「ブルゴヤン」の大軍と引従へ「加拿他」も
 より討入りて路々の「亞軍」と追散し「屋」を焼倉庫と「護」き
 「法徳義都華」の地まで押入りつゝ「ベニングトン」の
 「亞軍」の兵糧「器械」も多く蓄へ在ると聞出「コロ子ル官」
 の「ホウム」と云ふ大將として「ベニングトン」へぞ向をせざる然る不

「ベニングトン」府と守りつゝ「亞国」の大將「マリ」スタアクハ殊不
 敏捷性をもつて「兵」と引いて半途不待受勢
 猛不押寄せ来る「英吉利」勢と際止め散々不討破と「英將」曰
 「ルゴヤン」の本陣より援兵走付来ると雖も是と云ふ追散し大
 將「ホウ」の不重傷を負せ兵士と俘虜ふするて數百分捕の
 器械も若干かまふ「亞軍」の勢も盛大と成り「英の大將」曰ルゴ
 ヤンの「熱」いあるとて「味方」の「氣折り」と引出せしむ如す
 此處で捨置「阿而別尼」の地不至り「味方」の大將「シント」
 レーケルの兵と一ツ不成人ふと其を配りて「如何」せん
 「亞軍」嶮岨の地不依りて往方の道と遮りしむ「如何」せん

とどふうち亞米理加方ハ「ゼ子ラル官」の「ゲート」北軍總督
 の命と請く「フヒスキユル」と云ふ地より出張「ゼ子ラル官」の
 「アルブルト」と云ふ大將も続いて到着する「アム」亞軍の勢
 は倍猛り爰ハ於て英將「ブルゴヤン」其兵不捨置かざると
 總勢と引卒「スチナル」トと云ふ処より押出せし亞
 軍の大將「ゲート」も此方と聞と整へ早く人数と操出
 英亞の兩軍遂ハ軍と接し「小至り」大砲小銃の音夥しく追つ
 返しつ終日攻戦ハ勝負と分らずと雖ども兩軍疲れて相引
 小分と「後ハ」五ハハ戦争の擬勢多々頓合てぞ扣えし
 十月七日兩軍再度兵と接し劇戦數刻不及ハ「小英軍」遂

ハ討破られ大將「ブルゴヤン」ハ「サラトガ」の地まで辛く引退せし
 ども兩度の戦争ハ兵卒二万余人と失ひ手負病人二千餘
 人ハ至るハ今ハ如何ハとも詮術なき話路と求むるの外を
 り「アム」亞軍の大將「ゲート」兵と四方ハ分け配りて出口
 と塞ぎけしハ英將「ブルゴヤン」ハ爰ハ百計尽て以て遂ハ五
 千七百餘人の兵士と軍器五千と差出し「アム」亞將「ゲート」ハ
 軍門ハ降と乞ひて参りけしハ「英吉利」の兵ハ陥り北
 部の國々も漸く亞軍の方へ戻り案下再説費勅特費
 府ハ在る英軍の總督「ハウ」ハ「テラワレ」河の砦ハ屯集
 ありし元帥「華盛頓」ハ軍と討んと一隊の兵と止めあき

自身へ総軍と引具いて一日耳曼邑の地まで出張あり
 ころけ時元帥華盛頓が兵へ一万不足らざる而已るらず
 器械弾薬小乏しく服破り香切り兵卒過半の妻既
 りと元帥へことと深く控恤り自身も兵卒と困苦と
 同ぢう衣服飲食一ツとして是と異なるを言けと諸
 卒も偏へ華盛頓が徳と慕ひて怨めるの色あるとあり
 因りて華盛頓へ猶一戦と試んと思ひ全備せ兵既小
 春中「チコンデロガの地の大将「ゲートの許と「モントゴメリ
 イの地の大将「ボット子ムの許へ分隊して應接おそわいかさ
 ける故に切迫の由と告て早く兵士と戻し呉らとよと言送り



華盛頓
 陣中
 患者と

けども「ゲートも「ボット子ムも
 り小託して援軍と返さず然れ
 ども華盛頓の既小戦いと決
 して「ゲラワレ河の砦と立出で
 不意お起つて一日耳曼邑の敵
 陣へ其処彼処より討入るとい
 英軍大いお狼狽周章銃よ
 九よと立騒ぐと並軍い爰ぞと
 攻蒐て敵と討と大方あらず

然ととも流石英軍の撰り切らる精兵多し、総督「ホウと
 始めとく踏止まり守返し戦ふ者も澤ある故又追々小色
 と直し劇戦する、三時ふ及べば亞軍の次第小弾薬つき
 稍敗せんとぬり時、もあつて四方俄小霧と霰し咫尺を介
 こぬ程みとい敵も味方も混乱し果へ双方共崩と成
 りて引退き華盛頓へ猶「テラワレ河の砦小帰陣し英將
 「ホウの一日耳曼邑ふも止り得ず総軍断離し小成りて
 或ひ先立或ひ後と費勒特費府まで退きける、時「合
 衆國より「佛蘭西國不出張り居る「佛蘭克林とらふ
 大将より添書と得て「ボウランド國の「コスシユスとりふ者

軍役と勅めさき由と以て来りけと「華盛頓へ面會して
 「合衆國自立の爲の戦争ふ力と添へ給へんと、其由縁
 解し「と云ひけと「コスシユスへ免角も使ひて試みて
 へとある故先其意ふ任し、小け者築城の術小妙と得
 て数々勲功ありとある、又佛蘭西國の「ラフヘトとり人辺頃
 妻と失ひたる哀しみの心慰めとて遙々「合衆國へ渡り来り
 新國自立の爲の戦争ふ力と添て戦ふとて陣営小加つ
 ころ亦「紐約府の人小「アレキサントルハミントンと言ふ者あり
 昨年よりの戦争小拔羣の功名有り、かけ時「華盛頓
 の陣巧へ来とべ元師も是と軍事と談ず、小未と二十歳

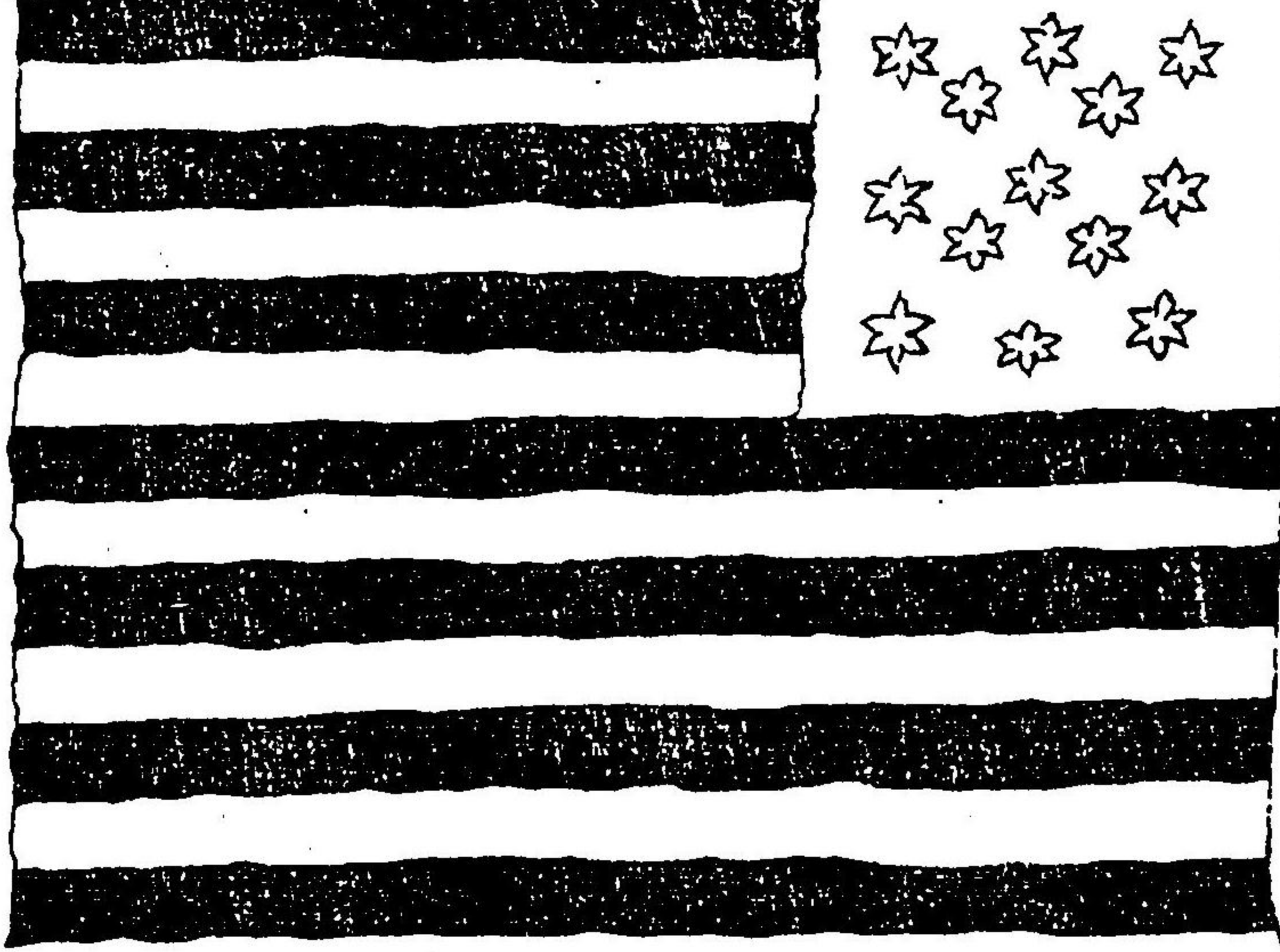
西洋新書

三十五

の若冠わかかんもとも敏捷びんきやうふく老実らうじつあり其人しんじん身體しんたい小あといハ
 ルリスワンと云ふ大将たいしやうは是と小獅子せうしと字あざなト「華盛頓ワシントンハ小
 供こども小供こどもと呼びあひて二の者ものとぞ頼たのみりるがけ若後わくごふ至
 り合衆國がうしゆうこくのあふ大功業たいこうごうと現あらハ其名なと後世ごせいふ裏うらせハ
 世の人の知る所しるしよあり斯かくて其年としも暮くれて明あき七百七十八
 年ねん今いまより百四年ひゃくしやうねんあすの正月しょうげつ合衆國がうしゆうこくの公會こうかい呀やは是こゝを費つぎ
 勒特費府レッチェスターふ在ありしうど英軍えいぐん爰こゝふ入りてより「約邑やくいの地ちふ
 移うつりしり」がけ公會こうかい所しよふ於おけ國旗こくきの記號きごうと定めたり其
 文ぶんハ日紅にっくわうと白はくの十三の横線よこせんハ共和同盟きやうわつどうめいの十三羽うと像さうと
 青空せいこうハ十三の星せいせいの數かずと頭あたまハせりも是こゝを同盟どうめいの十三羽うふ表あらわす

と云々
 是こゝより前ぜんふ合衆國がうしゆうこくの大学だいがく者しやハ仏蘭克林フランクランドとよ人ひとの前まへ
 條じょうふも言いはるが如ごとく佛蘭西フランクランドの首都しやうと「巴勒バールふ在ありて合衆
 國こくとて獨立國どくりつこくとらん」と計はかり居ゐたりしり」が遂ついふ千七
 百七十八年せん今いまより九十四年くじゅうしよねんあすの二月にがつ「巴勒バールふあき獨
 立國どくりつこくの礼れいとて佛蘭西フランクランドと和親わしんの條約じょうやくと取結とけび
 より自後じご仏蘭西フランクランド帝てい合衆國がうしゆうこくへ助力じゆりき合射がうせつ一軍艦兵卒いんかんへいそ
 ハ勿論もちろん機銃きじゆう彈藥だんりやく等らうも送りて専せんら是こゝを扶たすけ殊ことふ仏
 蘭西らんせいの豪將かうしやう「ラペットラペットと云へる人ひとハ潛ひそか亞軍あぐんへ助力じゆりきして
 是こゝでも屢しばしば英軍えいぐんと戦争せんそうふ及びおよびりるがけ時ときよりしてきりく

印也 旗を 国に 飛ぶ 合が カリメア



尽力をこめても 始めより 俸金
 と請ず 唯弱きを助くる 義氣
 と以ての故ありとぞ 爰おまの
 費勤特費ふ 屯を 一なる 英の
 総督「ホウ」が 諸勢の 府内にお空
 一と年と越て 亞國の 皆へ兵も
 出さず 二万の大軍 安閑と評
 諷ふ 月日と費すの 華盛頓が
 軍にお向ひ 度々も 懲り「おま
 り 然るに 英將「ホウ」の 英吉

利政府の首尾宜しからずや 同年五月免識して 本國へ呼戻
 さと代りとりて「ヘンリイクリントン」と云ふ者 亞國征伐の大
 総督と命ぜらると次て 費勤特費府にお在陣あり 総軍勢
 と指揮して以て 種々お軍慮と運し たり 亞米理加方におも
 費勤特費の諸方の 通路と断切て 其應援の道と塞き
 ことども 援兵とて 出せし 人数と各所へ 引止め 戻さば
 軍卒不足 ありし 手配り 厳らざる 然るに 英將「ホウ」の 免
 職して 本國へ 歸り「イクリントン」代りて 総督と成りし あり
 聞えけし 其混雑の時にお 費勤特費府を取戻
 さんと 既にお 進撃手の 準備 做せし ほど 弾薬の 不足あり

小及ぶと十四日小至り英軍次第小押迫うと漸戦ふ擬勢尽
 て同月十九日英将「閣倫華理斯」全軍七千餘人と引具
 終小華盛頓の軍門小膝と屈め器械と投げて降伏せり
 華盛頓が「約邑」への出軍極めて神速あり「紐約」小
 在る英軍等是と知らざりしが追々聞出り大い小驚馬き
 兵船数艘と発して「約邑」後詰めせり「閣倫華理斯」が
 降参の日より六日を経ての後をさへ如何小とも詮方あり
 援軍の兵卒等「空」く「紐約」へぞ船と戻りぬ再説華
 盛頓の勢ひ小乗じ猶「紐約」府と取戻さんと其用意
 頻りあり「小英國」の軍陣小て「閣倫華理斯」が亞米

理加方へ降参してより兵威大い小衰へ往戦ふ擬勢ぬけりとい
 専ら和睦の議論起り十七百八十三年今より九十九年おの
 一月二十日「小蘭西」帝の扱ひ小因り合衆國今より「英國」の
 管轄と放し獨立不羈の國多とを以てる小「英國」王是と
 請諾あり「英吉利」より「ピッチミルベルド」と云ふ人及び「ワシ
 ルド」と云ふ人兩人合衆國より「シジョン」アダムス「ベン」ミンヤン
 ランクリン等の人々使節とて「小蘭西」の首都「巴勒」小於て
 集會し和義新小調ひり「レキシントン」の合戦とを始め
 しく「約邑」の一軍小事終るまで七年の間大小の戦
 争二十九度小及び八年め小し始めて始りて炮声止みり

西洋新書 卷之三

三十一

初代
大統領



華盛頓
肖像

國人安堵の思ひを為せし華盛頓が功績ありて道理ある
る華盛頓と国父と敬まらる
尊ぶとや然とて華盛頓の本
宮より和談交親の成りたる
旨と十三羽へ告知らせ同年
十一月華盛頓へ全軍を解て
各所へ戻し自身も元帥の
任と公會の廳へ返り飄然
として家園へ滿注諾の家へ

歸へり斯く後我十三羽の父老公會所へ打寄り相談り
て云ふや我合衆国の軍兵は皆農商の人を以て離散して
耕作商賣とてと一仙蘭西の援兵は本国へ帰陣し華
盛頓も元帥の職を戻して田里へ歸るは英吉利王若し
盟約を破り再度軍艦とて向けらば何と以てこれを拒
ん且合衆国への固より首領の人を公事訴訟あると
さし誰か宜く裁判せんや今より君長を立て法度と定
め永久の治安とせらるる不如ず然りあがらんとて
君長と立ちあがらばその一代の善と雖ども子孫ありて不
賢の悪人出来く政事不怠り宴遊小長ト暴虐悔

慢の多あらば国家の乱と引出すべし然ば先華盛頓
 と首領と為り華盛頓の死後の衆評を以て賢者と擇
 び夫の代りと為り其任四年を以て限りと定むべしとて
 衆議一決し千七百八十九年今より九十二年の四
 月三十日強て華盛頓を推して大統領の職を任じら
 るとけ官の濫觴といわたり華盛頓職を在るに八年
 あり難と平らげ危を救ひ文と揚げ武と講し賢能
 を任じて公明と宗とするが四民大平の化を浴し農商日々
 夜々富み合衆国の芳名遠く四表を達するを以て
 千七百九十七年位と約翰阿丹子譲り再度故々の田

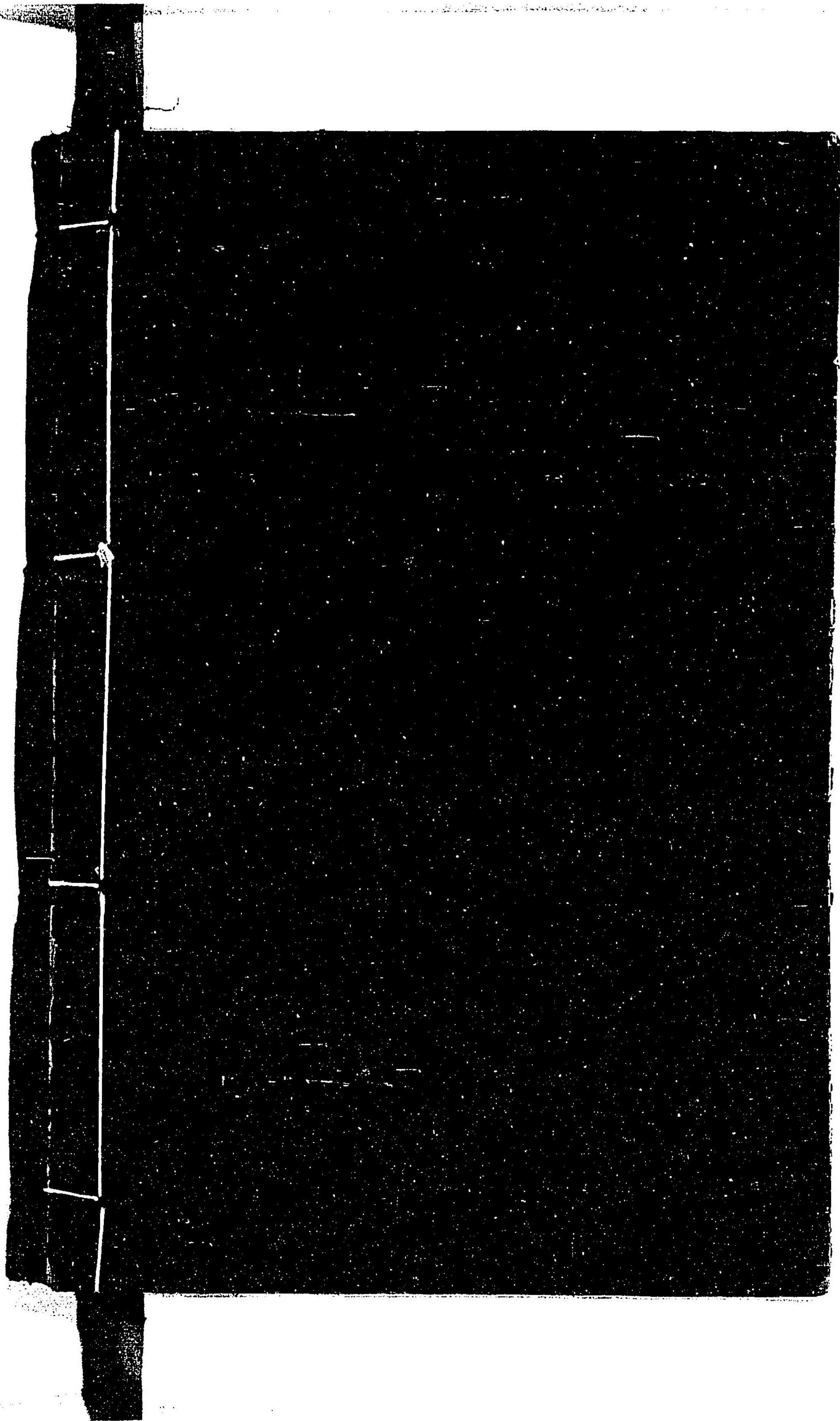
園を帰るにまこと猶ある時ハ國家のめふ尽力あること多
 かりしが聖齡六十七と一期として黄泉の客と成往し
 及び其凶聞共和の各功を達し諸民父母と亡ぶ如く
 大い其力と失るはは四境自づと愁然たりたり
 フスリステットと云ふ人此君を評して華盛頓ハ事ハ
 臨んで周詳あり慎んで密なるが故に功業顕えずハ
 ミトングと言はれし人政に従ひて其功鉅大あるが如し
 華盛頓の名歴史に載せ後世に残すは足と雖も時
 の人尚黨を植て華盛頓が罪あると誹謗り華盛頓
 深く是と感激す千七百九十七年大統領の仕満るは

及んで洒然として田園を歸り賢豪の行ふ所と以て
 自ら行ひ經濟の材と韜晦世と相遺して恬淡小歳
 月と竟り齡六十七にして卒す共和の國人皆痛之悼
 まざるものあり他國の人も亦深く之と惜む故に君の
 名と都府に命じて其功業と後世に垂る君卒する
 小臨之遺言に拏隷を全遺し大金と官に獻じて
 大學校と閣竜比亞に建南亞米理加のコロニ又貧兒校と
 其地に造らむ葬りし地の華盛頓の別荘にモウント
 フルンに在り土人いふ此大家の爲に記念の碑石
 と建す又一片の墓の碣に其功業と記して以て冢墓と

蓋へず然とも歴史に不朽の名と當め墓碣に彫るのみ
 不代と豈復求むる所あらんや華盛頓容貌尊
 嚴其才以て政事と執るに足り其勇以て不羈の
 大元帥たり不足しり事に臨んで凝重りたる百難
 競ひ起り勢ひ極めて重大あるに至るといふもいま
 掌て挫け折す國に忠あると百折をきども銷磨せ
 ず政に臨むに國體と失りざるを以て主として邦と
 尊ぶ人民と繁行し恩を施す一日も是と遺
 とす其ふるところ皆根に據つて私の見と主張せ
 ず事不處して嚴正をきども仁あり此華盛頓の天性

とす誠まこと不敬けいけい恭愛きんあい憐あはれをおくまをそ大業たいぎやうをなする偉功いこうをたする
建たつたべた奇男子きだんしをなりと云いふと

西洋新書三編上終



特31

館印

671

函架

古本